

ミケランジェロ・ブオナローティ

メディチ邸外壁第一層の窓の正面図と断面図案

1519年頃

ペンとインク、紙 271×187mm

カーサ・ブオナローティ

Michelangelo Buonarroti

Studio, in prospetto e sezione, di una finestra inginocchiata per Palazzo Medici

circa 1519

penna e inchiostro, mm 271 × 187

Firenze, Casa Buonarroti, inv. 101 A

この素描は、フィレンツェの中心地にあるメディチ邸（現メディチ・リッカルディ宮殿）の窓を描いたものと考えられている。中央には破風と窓台を伴う矩形の窓の正面図が、その右下には、それよりやや小さい縮尺の断面図が描かれている。窓台は二つの持送りによって支えられているが、そのシルエットは断面図で確認できるように縦に長く引き伸ばされたS字形をしており、まさにこの形によってこの窓は1500年代の中頃から「跪座の窓（ひざまずいた窓）」と呼ばれてきた。

全体は、ペンとインクによってフリーハンドで描かれているが、基準線として垂直方向に5本（中心と、窓の両縁と、全体の両端の位置）の切り込みが入られ、その間隔は、約30mm、35mm、35mm、30mmとなっている。この切り込みは、水平方向にもコーニスの高さの位置に1本見られる。この正面図で、窓の開口の高さを、実現されたものと同じ4ブラッチョ〔br.〕（フィレンツェでは1br.は58.36cmなので、4br.は2.33m）として描いたとすると、1br.を2.4cmの長さとして描いたことになる。したがって、この素描の縮尺は1:24ということになるが（ $2.4 : 58.3 \approx 1 : 24$ ）、この縮尺は当時のフィレンツェの建築家にとっては不自然なものではない。このような基準線の存在や、きりのよい縮尺によって、この素描は、ある程度設計が進んだ段階のものと考えられるが、とはいえ実現されたデザインとも相違があり、さらに、まさにこの素描の中に設計過程が観察できるものとして興味深い。

たとえば、破風の形は、三角形だけでなく楕円状の曲線としても検討した形跡が見られる。破風を支えている持送りは、この素描ではコーニスのすぐ下に接しているが、実際にはその間にブロック状の石が挟まり、持送り自体はもう少し小さくなった（右下写真）。逆に、窓台を支える持送りは、これは特に左を見るとわかりやすいが、最初はもう少し小振りで、長さは半分よりやや短く、幅も若干狭いものだったようだ。これに類似したものはポッジョ・ア・カイアーノのヴィッラ・メディチの窓台の下にもあるが、その持送りの表面には装飾が施されていた。これに対して、本素描にみられるメディチ邸の

持送りの大きな特徴は、それが最終的に非常に長く引き伸ばされたことと、その表面に装飾がなく一種の抽象形態のように表現されていることだ。このように表面が平滑な持送りは、少し形は違うが、ミケランジェロの手によるローマの古代建築のスケッチにも描かれていた（カーサ・ブオナローティ2A*v*）。また、サン・ロレンツォ聖堂ファサード計画案にも、壁龕の上部に、平滑な表面を持つ持送りが見られる（同100A, cat. no. 35）。実現されたデザインとの、いま一つの大きな違いは、この素描では窓の両脇の付柱が下まで届いていることで、それに対して、実際の窓では柱は窓台までしか届いていないが、全体の構成はより整理され、上下の二つの持送りは同一線上に並ぶことになった。（YS）

参考文献:

Ackerman 1961, pp. 129-131, 137; Vasari/Barocchi 1962; トルナイ 1978-1982 (Tolnay 1975-1980); Argan, Contardi 1990; Elam 2006⁹, pp.178-181; Morolli 2007.



フィレンツェ、メディチ邸（現メディチ・リッカルディ宮殿）



メディチ邸（現メディチ・リッカルディ宮殿）外壁第一層の窓

